

## 有限の時間、無限の愛

福岡県 福岡市 <sup>え</sup> <sup>とう</sup> <sup>し</sup> <sup>の</sup>  
衛藤 梓乃

夏休みが来るたび、私は毎年「別荘」に遊びに行く。大分市から杵築市へ。1時間ちょっとの道を車に揺られて辿り着く、おじいちゃんのおうちは自然豊かで大きい。小学生の頃の私が襟を正すのは玄関先での挨拶の時だけ。ポストンバッグを車から運び出して、仏壇へのお参りを済ませたら、夏休みの開放感も相まってうきうきが止まらない。おじいちゃん、おばあちゃん、どちらの前に顔を出しても歓迎され、喜ばれる。孫娘としてたくさんの愛情を一身に受けた私は祖父母の家を我が物顔で歩き回り、時には走り回る。

蝉の声をBGMに広いお家を探検し、客間に忍び込む。この扉には簡易的な鍵がついていて、特別感があるので1番のお気に入りだった。中に入るとべっ甲色した重厚感のある柱と、立派なオルガンがどっしりと構えている。指を滑らせ学校で習った「荒城の月」をたどたどしく演奏して、それに飽きたら日当たりの良い縁側に出る。広大な庭一面が鮮烈な緑で彩られ、よく手入れされた芝生がそよそよと風に靡く。草いきれに誘われ外へ飛び出すと、大きく平らな庭石があって、登るとみかん畑とそのずっと先の方まで見渡せる。Tシャツの裾から、夏風がお腹を撫でて吹き抜けていく感覚がすがすがしい。ぼーっとしていると、納屋の冷凍庫からいちご味のパック入りかき氷を取ってきた祖父が、一緒に食べようと声をかけてくれる。

夜になると「別荘」は色を変え、深い闇に包まれて虫の鳴き声しか聞こえなくなる。トイレは長く暗い廊下の先にあって、ちょっと怖いので早めに済ませておく。トイレからの帰り道、キッチンを覗くと日記を書いていた祖父に「お菓子食べるか?」と勧められる。私の母は夕食後にお菓子を食べると咎めるので、「よる9時なのがいいの?」と尋ねると、「夜の3時のおやつや。時計の針もちょうど反対になってるやろ?」と返されて、大義名分を得た私は、祖父の膝に乗りお菓子を食べながら、まめに日記を記す手元を覗き込む。「今日は梓乃ちゃんが来てくれたって書いてるんや。」なるほど。癖のある上に漢字が多いのであまりすんなりと読めないが、確かにそこには私の名前、「梓乃」という漢字を読みとることができて、にこにこする。

ある年、祖父の家に1泊した後そのまま塾に行かなければならなかった時には、おばあちゃんがお弁当を作ってくれた。おにぎりとういんナーと卵焼き。塾で蓋を開け、塩むすびを口にする。瞬間、口いっぱい絶妙な塩加減とお米の甘みが広がる。私は当時、あまりの美味しさに塾で1人、目を見張った。塩むすびがこんなに美味しくなるなんて。信じられなかった。おばあちゃんのお弁当を食べたのはその1度だけだったけれど、その味は今でも舌の上に鮮明に残っている。

祖父母はその後も私を可愛がってくれた。大学に入学した際はお祝いとして自動車学校の費用を出してくれ、貰ってばかりでは悪いと思った私は生まれて初めて手にしたバイト代で、祖父母に菓子折りを買って渡した。こちらが恐縮するほどとても喜んでくれたが、菓子折り程度で恩返しできるはずもないほど愛してくれていたのは重々承知していた。ほどなくして祖父母は介護施設に入所することとなる。

夏の日差しの中に、草いきれを乗せた風が吹き抜ける時。夜の9時に小腹が空いた時。塩むすびを食べる時。あの幸せな記憶と一抹の寂しさを覚えて胸が苦しくなる。小さな菓子では到底返すことの出来ないほどの大きな恩に、私は報いることが出来ているのだろうか。

祖父母に限った話ではないが、人と人が一生のうちに顔を合わせ、言葉を交わせる回数は案外少ないのだと思う。どれほど願っても、触れ合える時間は有限である。私も祖父母に会える時間を大切にして、面会や手紙で直接感謝を伝えるのは勿論のこと、彼らから受け取った愛と恩に恥じない大人になりたい。